平成22年度
工芸技術記録映画
文部科学省特別選定

鉄釉陶器

―原清のわざ―

「形がひとつの実在であれば、陶器の文様というものは、夢でなければならない。」

陶芸作家・原清は、石黒宗麿、清水卯一という二人の師から学んだ陶芸全般にわたる該博な知識をもとに、鉄釉の特質を生かした黒釉と褐色釉の二重掛けによって動植物の文様を表すという、独自の作風を確立した。

この映画は、原清の「鉄釉花鳥文大鉢」の制作工程を追いながら、その鉄釉陶器のわざと、作陶に対する思いを描いたものである。

35ミリ・カラー・39分

企画　文化庁

製作　桜映画社

販売価格（消費税別）

DVD・VHS＝個人価格 5,000円

ライブラリー価格（団体使用権付） 30,000円

16ミリ＝280,000円

原清の仕事―その真髄に迫る

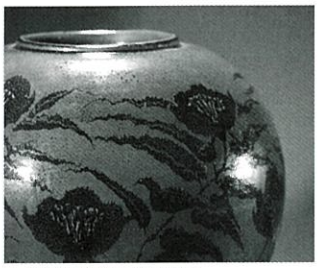
永青文庫館長・東京藝術大学名誉教授　竹内順一

原清（はらきよし）氏は一九三六年島根県に生まれ、陶芸の道を志して、一九五四年に京都八瀬の石黒宗麿の内弟子になる。やがて宗麿の推挙を受け、京都五条坂の清水卯一に師事する。この二人の師は、その後、奇しくも「鉄釉陶器」の重要無形文化財保持者となった。

この経歴を知る限り、師から鉄釉技法のすべてを学び、陶芸の王道を歩んだかのように思える。しかし、原が教えられたことは、「陶芸家としての心構え」と「陶芸の名品に接すること」の大切さであった。今でもそうであるが、原は自己の作陶技法を誇らしげに他人に語ることは決してない。おそらく、二人の師からの教えは、心中に留めるものと思っているにちがいない。

筆者が原の作品に衝撃を受けたのは、一九九七年第四十四回日本伝統工芸展の「鉄釉鳥文大鉢」（東京都知事賞受賞）である。多くの作家が技法を「見せよう」と腐心するのに対して、原はそうした傾向に超然とし、「陶器は土から生まれる」とばかり、淡々と「土の力」に依拠した図太い形態を作り、しかも、「派手な見栄え」のない「鉄釉」に挑んでいた。

原の仕事は、今も変わらない。独自に調整した黒釉と褐色釉の二重掛けによる動植物文の大らかな展開が魅力である。同時に、「土との自然な対話」があって初めて成り立つ陶芸である。これを、あますことなく伝えているのがこの記録映画であり、同時に、記録映画でしか迫れないものがあることを改めて教えられた。



1. 代表作「鉄釉花鳥文大壺」

3. 捻じ揉み

4-1. 大鉢の成形

4-2. 高台をつける

［DVD 収録内容］

1. 鉄釉陶器とは

鉄釉陶器は、釉薬に含まれる鉄分によって黒色・茶色・黒褐色・柿色などを呈色する陶器の制作技法で、古来、中国各地でつくられ、わが国では鎌倉・室町時代に瀬戸で焼かれて以来、発展してきた。原清は、この鉄釉陶器で独自の作風を確立した。

2. 生い立ちと、2人の師との出会い

少年の頃、陶芸に惹かれて京都で働くようになった原は、陶芸家の石黒宗麿に出会い、内弟子となった。その後、石黒の一番弟子・清水卯一のもとで10年間、本格的な陶芸を学んだ。

3. 作品の構想、陶土の調整と土もみ

原は、土物らしい素朴な味を出すために、あえて成形のしにくい、傷の出やすい滋賀県産の篠原土を選んでいる。この土を十分に揉み、土の中の空気を抜く。

4. 大鉢の成形

大きな丸板の上に土の塊をのせ、手で叩いてのばし鉢底をつくる。次に、太い粘土のヒモで鉢の縁の造形をし、コテやヘラなどの道具で形を整える。半乾きになった鉢に高台をつける。

5. 施釉、絵付け、生ゴム液を塗る

素焼の終わった鉢を一つ目の釉薬「黒釉」にずぶ掛けし、終わるとすぐコンテで絵付けをする。絵の部分には生ゴム液を塗る。この部分が焼き上がると「黒いシルエット」になる。

6. 釉薬の二度掛け、ゴム液をはがす

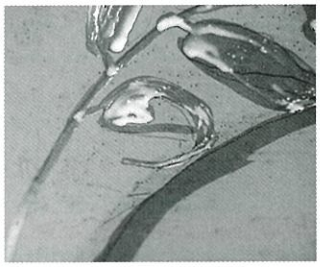
二つ目の釉薬「褐色釉」を、ゴム液を塗った文様部分に刷毛で塗る。固まったゴム液をはがすと、そこには絵筆では表せない文様が生まれてくる。

7. 窯詰めと本焼焼成、窯出し

1,230度で22時間酸化焼成する。窯の火を止めて数日後、窯が冷めたところで、窯出しをする。

8. 完成作品「鉄釉花鳥文大鉢」

赤褐色の背景の中に、動植物の文様を黒いシルエットで浮かび上がらせた作品。色彩をほぼ2色に抑え、深い鉄釉そのものの深遠なイメージが表現されている。（完成作品は表面参照）



5. 生ゴム液を絵付部分に塗る

6. ゴム液をはがす

7. 窯出し

陶壁「希望」（埼玉県寄居町役場エントランスホール）

原清 はら・きよし

昭和11年（1936）島根県に生まれる。昭和29年、清水卯一に師事し、本格的に陶芸を学び始めた。昭和40年、東京・世田谷に築窯して独立し、鉄釉を中心とする技法・表現上の研究を重ねて技の練磨につとめ、伝統的な鉄釉陶器の高度な技法を体得した。以来、陶芸全般にわたる該博な知識をもとに、鉄釉の特性を生かした制作をつづけ、独自の作風を確立した。そのおおらかで洗練された作風は、鉄釉陶器の技法の新たな展開を示すものとして、高い評価を得ている。平成17年（2005）に、重要無形文化財「鉄釉陶器」の保持者に認定。また、平成4年から（社）日本工芸会理事、平成22年には、同会副理事長に就任し、後進の指導・育成にも尽力している。

協力
東京国立博物館
東京国立近代美術館
世田谷美術館
愛知県陶磁資料館
射水市新湊博物館
埼玉県大里郡寄居町
NHK（映像提供）

語り 湯浅真由美

重要無形文化財・関連作品DVD

「白磁 ―井上萬二のわざ―」35分
「民芸陶器（縄文象嵌）―島岡達三のわざ―」37分
「萩焼 ―十一代三輪休雪の鬼萩―」37分
「小鹿田焼」34分
「色鍋島」29分
「利休の茶」47分

作品・ご購入のお問合せはこちらへ

株式会社 桜映画社

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷 4-20-1 千駄ヶ谷ビル 4 階
tel 03-3478-6110 fax 03-3478-5966 http://www.sakuraeiga.com